

棚田学会通信

第65号 目次 2021年11月26日発行

第17回石井進記念棚田学会賞 受賞記念スピーチ・・・・・・・・・・	2
棚田学会 第8期理事会 新任理事の自己紹介・・・・・・・・・・	4
事務局ニュース・・・・・・・・・・	8



長野県上田市・稲倉の棚田



千葉県鴨川市・川代集落

今年8月に行われた棚田学会大会において、第17回石井進記念棚田学会賞の授賞が行われました。本号では受賞した2件の方の記念講演の内容と、新たに発足した第8期の棚田学会役員の方々の中から、新任の理事の方々にお寄せ頂いた自己紹介をお届けします。

(棚田学会編集委員会)

第17回石井進記念棚田学会賞 受賞記念スピーチ

川代集落（千葉県鴨川市）
庄司祐輔さん

私は、千葉県鴨川市川代集落の庄司祐輔と申します。

この度は第17回石井進記念棚田学会賞を頂きまして、誠にありがとうございます。私達は、自分の故郷を元気に、同じ世代を楽しく生きて、厳しい農業環境の中を生きていくために集落をあげてこの中山間の取り組みを進めているだけですが、このような素晴らしい賞を頂けるとは思いもよらず、集落の仲間も大変に光栄に思い喜んでおります。先程、ご紹介頂きましたとおり、私達の集落は61戸の部落で、棚田における中山間地域等直接支払制度に関わっている人は41人、その内の31人が活動に参加し取り組んでおりますが、9割が65歳以上の高齢者で、50歳前後の参加者は4人となっています。

しかし、後にしっかりと残すために、中島峰広先生にアドバイスを受けながら、オーナー制度や学校の農業体験、地元鴨川市へのアピール、農村景観の見える丘作り、駐車場より棚田へ続く道の桜の木やアジサイの植樹等による景観形成活動といった様々な活動を行っています。今後は、非農用地を利用しての直売所や、米作りの拠点となるライスセンターの新設等も考えており、後継者問題への対策も含め、1箇所に施設を纏め、中山間の取り組みを基に皆で進んでいきます。

川代集落は小さな集落ですが、全体で40町歩の水田、その中で中山間地域等直接支払制度は20町歩程です。棚田百選というわけにはいかず、直払の他の予算は限られており、建物や施設は自分たちで考えて作っていくしかありません。

一昨年、山口県長門市で開かれた棚田サミットにおいて、中島峰広先生のコーナーで紹介された棚田支援法（編集委員会注：棚田地域振興法）の事業に取り組むことで、その資金によりこの春、棚田に立派なトイレが出来ました。そしてまた、将来を見据えて、コンボの購入も行いました。お陰様で少し先が明るくなった気がします。



新たに設置されたトイレ



購入したコンボ

今後も集落の皆と頭を使い、充実した環境作りをしたいと思います。

余談ですが、棚田百選はありますが、私達のような中・小規模の棚田を対象とし、範囲を広げた棚田200選、300選というものはないのでしょいか？山には200名山・300名山があるように、指定の幅を広げ認定を受ける棚田が増えることで地域の意識も上がると思います。どうかご検討の程、よろしく申し上げます。

最後になりますが、この後の基調講演についても、今後の私達の活動の参考にしたいと思い、楽しみにしております。本日のこの素晴らしい賞を頂いたこと、今後の集落の糧として、皆と共に取り組んでいきたいと思っておりますので、ご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

稲倉の棚田保全委員会（長野県上田市）
久保田良和さん

上田市は長野県東部に位置し、北端の菅平高原、南端の美ヶ原高原に挟まれ、中央には日本最長の千曲川が流れる人口約 15 万人の都市です。

市内には寺社などの文化遺産が多数みられるほか、戦国武将・真田氏発祥の郷として知られ、2016 年には NHK 大河ドラマ「真田丸」の舞台となりました。

気候風土にも恵まれており、農業も盛んです。年間の晴天率が高く、全国でも有数の少雨乾燥地帯であり、標高が高く昼夜の寒暖差が大きい。日照時間の長さ少雨が、農産物の光合成を活発化させ、農産物の発育や養分の生成を促す。夜間の低気温が、農産物の呼吸と養分の消費を抑え、多くの養分を蓄積することで食味が良く良質な農産物を育てます。

そのような地で、先人たちは古くから棚田での稲作に取り組んできましたが、棚田の地形的不利による生産効率の悪さや、棚田を支えてきた中山間地域の過疎化と高齢化の進行による農業の担い手不足により、徐々に棚田での耕作が放棄され、荒廃が進行していきました。

棚田の荒廃と棚田を核とした農村地域の活力の低下に危機感を持った地元住民たちが、地域活性化の想いのもとに「稲倉の棚田」での保全活動を始めました。

その取組みと稲倉の棚田の美しい景観が評価され、平成 11 年に農林水産省より日本の棚田百選に認定されました。

その後、平成 15 年に稲倉の棚田保全委員会が組織され、より本格的な保全活動や地域振興活動が開始されましたが、その間も徐々に過疎化・高齢化は進行し、地域住民だけでは、棚田の保全は困難な状況となっていました。

そんななか、持続的に棚田を保全するために始めた取組みが棚田オーナー制度でした。

農村地域が、過疎で悩む一方で、都市部では過密や自然環境の喪失といった問題を抱えています。

そのギャップを補完すべく、棚田オーナー制度を導入することにより、都市住民に自然豊かで絶景の棚田での米作りや地域の行事などへの参加体験を提供することで棚田を含む農村地域に新たな収入源と賑わいをもたらすことができます。

しかしながら、平成 18 年度に初めて募集を行っ

た際には、わずか 13 組の応募でした。

棚田の魅力と知名度の向上が棚田存続の喫緊の課題となりました。

以後、稲倉の棚田では、約 100 体の案山子を設置する「案山子祭り」、ろうそく 1500 本を展示する「ほたる火祭り」、棚田内でのマウンテンバイクレース、近年では新たなオーナー制度として、地域の老舗酒蔵である岡崎酒造と連携し、棚田での酒米作りを提供する酒米オーナー制度、休耕田を利用して約 100 基の色とりどりのテントが棚田に集結する棚田 CAMP、深刻化する野生鳥獣被害の忌避や五穀豊穰を祈念して、棚田内を松明をもって練り歩く「ししおどし」など、新たな取組みに次々と挑戦し、



田植え



ししおどし

関係人口を増やし、棚田の知名度を向上させてきました。

それらの取組みが実を結び、令和2年度には、棚田オーナーが100組を超えるまで増加しました。

今後も都市農村交流を軸とした新たな取組みに挑戦し続け、棚田に携わる関係人口を増やし、持続可能な棚田の保全と地域活性化を達成したいと考えています。

以上、主に観光面での取組みについてご紹介させていただきましたが、最後に営農面についても触れておきたいと思います。

棚田は土地条件の不利により、営農としての価値だけでは成り立ちません。

とはいえ、観光面に傾倒しすぎ、営農を疎かにすれば、早晩にその景観の美しさは「はりぼて」となり、観光面の魅力も失われるものと考えています。

棚田の保全は、その大半が地道な草刈りや水管理です。

棚田の美しい景観の裏側にある、先人から続く人々の地道な努力こそが、営農と観光を繋ぐ棚田の持つ最大の魅力です。

棚田の保全に楽な道はありませんが、この度の棚田学会賞をきっかけに、棚田の本質的な魅力を我々自身が再認識し、また多くの人に発信し、次世代に棚田を引き継いでいくための努力を稲倉の棚田は今後も続けていきたいと思っています。



空撮した稲倉の棚田全景

棚田学会 第8期理事会 新任理事の自己紹介

去る8月21日に行われた棚田学会総会において、第8期の理事会が発足しました。そのうち、新任の理事の方々に自己紹介文を寄せて頂きましたので、氏名の五十音順で掲載します。

◆岡田洋民さん

今期より棚田学会の理事を務めることになりました埼玉深谷在住の岡田洋民です。

これまでは、研究委員会の一員としてシンポジウム開催にあたり、オンラインに関わる作業を務めてきました。8期においてもシンポジウムや発表会の開催におけるZOOM関連作業を継続して務める予定です。

会員あるいは理事としての自分の基本的なスタンスは、とにかく棚田学会の活動に積極的に参加することであり、このことが、微力ではありますが学会の活動を盛り上げ、ひいては棚田保全につながるのではないかと考えています。

個人的には幸いにも年金生活で時間には余裕があるので、積極的に棚田に向き棚田探索と写真撮影を楽しみ、加えてできる限り棚田で作業をしてられる農家の人にも声をかけ、棚田の価値を分かちあえる機会を作っていきたいと思っています。

歳は取っていますがまだまだ未熟であり、皆様のご指導も併せてお願い致します。



◆落合基継さん

早稲田大学社会科学総合学術院准教授の落合基継と申します。もともとは農業土木の農村計画学で学びました。農村計画、地域づくり、農村景観を専門としています。現在ゼミの学生とともに山形県大蔵村の「四ヶ村の棚田」や静岡県伊豆市湯ヶ島の茅野地区（わさびで有名なところ）に定期的にお邪魔して調査研究をしています。大学が東京のご真ん中にあることから、ここ一年半ほどコロナの影響で農村への訪問がほとんどできておらず、学生ともども歯がゆい日々を過ごしております。コロナがおさまりましたら多くの農村を訪れたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



◆菊池稚奈さん

大学では建築学を専攻、卒業後は都市計画の業務に携わり、10年ほど前に中山間地域活性化のプロジェクトで棚田との関わりを持つようになりました。棚田の美しさとともに持続が困難な状況を目の当たりにし、自分たちにできることから始めようと「棚田まなび隊」という棚田保全グループを立ち上げ、福岡県うきは市のつづら棚田で年間を通じた耕作活動を実践しています。また、九州大学総合研究博物館にも籍を置き、棚田をエコミュージアムや文化的景観の視点から考える研究を行っています。棚田学会は俯瞰的に棚田を捉える場として、また錚々たる先生方のお話を伺える場として楽しく参加させていただいています。

一方で、地域ブランドへの関心から九州大学芸術工学府の社会人ドクターとなり、棚田米のブランディングの研究に取り組みました。今年度で課程博

士取得の年限となるため急ぎ博士論文を執筆中ですが、瀬戸際で悪戦苦闘しています。



◆関口広隆さん

本格的に棚田にかかわり始めたのは、フィリピン・ルソン島の山岳地域にある世界遺産の棚田保全プロジェクト担当となった2007年からでした。危機遺産リストに入れられてしまった棚田で稲作が未永くできるようになるにはどうしたらよいか、イフガオの人びとと一緒に考えていく中で、棚田を守り続けてきた人びとの「民の知識」は、得難い宝物であるとの思いが強くなってきました。棚田学会の関心の中心である日本の棚田については、まだまだ勉強中です。皆さまにいろいろ教えていただければ幸いです。理事会では総務担当として、皆さまの縁の下での力持ちの一人として貢献できればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



◆堀田恭子さん

専門は環境社会学です。公害・環境問題を社会学の視点から調査研究をしています。私の原点は新潟水俣病問題です。患者の方々の被害の実態や阿賀野川と人々の暮らしや結びつきを聞き取り調査のもと研究を行ってきました。



その後、長野県自然保護研究所に勤務していた時になぜか私の公害研究に興味を示した当時信州大学農学部の木村和弘先生が、私を姨捨棚田に誘ってくれたのが棚田との最初の出会いです。長野を離れ長崎大学在職時には学生と県内の棚田百選地区をまわり、現在の立正大学では社会調査実習という科目で棚田を教育の現場としています。私自身の主な研究は現在、日台油症事件ですが、他方で棚田保全の研究を形にしなくてはと思いつつ日々を過ごしています。3年間どうぞよろしくお願いいたします。

◆本中眞さん

以前に、長野県千曲市の姨捨（田毎の月）の棚田の保全活動に関わっていたご縁で、このたび理事として学会活動（編集）に関わらせていただく



こととなりました。現役時代から棚田が持つ文化的価値に関心があり、名勝や文化的景観の観点から棚田の顕彰のための行政的施策の推進に携わってきました。現在は東京から奈良に居を移し、若い人たちが国内外において取り組む文化遺産の調査研究活動を支援する立場におります。学会活動そのものに不慣れの身ゆえ、何かとご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

◆吉田謙太郎さん

私は北海道の軽種馬牧場に生まれた道産子ですが、今は九州の田園生活を楽しんでおります。農林水産省農業総合研究所では、農業・農村の多面的機能の全国評価などを行ってきました。現在は、九州大学エネルギー研究教育機構という、エネルギー・脱炭素問題を扱う所属先にはありますが、兼担先の共創学部では身近な農業・農村問題が重要なテーマの一つです。私が福岡県で生活の場として選んだ糸島市はブランド農産物の産地であり、産直市場の伊都菜彩が有名です。近隣には、百選に選出された棚田以外にも美しい棚田が多く、コロナ禍ということもあり、気が向くとカメラを携えて一人でバイクツーリングしております。彼岸花と棚田の組み合わせは何度見ても心が癒やされます。



*なお、以上の方々のうち、落合さん、本中さん、吉田さんには、編集委員としてもご活躍頂きます。

最近の動向から

「つなぐ棚田遺産」の公募が始まりました

棚田百選（1999年）から20年余が経過したこともあり、今年度、ポスト棚田百選（仮称）選定委員会が設置され、10月28日（木）開催の第1回委員会で、名称が「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」と決まりました。11月15日（月）より公募が始まっておりますので、お近くの棚田地域の方にお声かけ下さい。（パンフレットを同封しております）

また棚田学会では、オフィシャルサポーターの申請を検討しており、全国の棚田地域に頼られる存在を目指しています。

棚田地域振興法が農水省単独ではなく、関係省庁の共管で成立したと同様、選定委員会も各省庁から推薦されたメンバーで構成されています。総務省推薦水柿大地氏、文化庁黒田乃生氏、農林水産省推薦山本早苗氏：棚田学会理事、国土交通省推薦池邊このみ氏、観光庁樋田かおり氏、環境省中島淳氏、およびNPO法人棚田ネットワーク代表中島峰広氏：棚田学会顧問、棚田学会会長山路永司でした。

（文責・山路永司）

農水省で棚田の展示があります

農林水産省「消費者の部屋」で、昨年に引き続き、特別展示『棚田に恋～日本の棚田とその様々な機能～』が12月6日（月）から10日（金）に開催されます。

展示内容は、棚田カードの取組に関するパネル展示、農業・農村の多面的機能のパネルやパンフレット展示、棚田や多面的機能のPR動画の放映、体験学習とのことですが、棚田学会でも、学会紹介のパネル、そのA4判印刷（来場者持ち帰り用）、棚田写真のモニター連続表示を準備しています。

ご都合の付く方は、ぜひお出かけ下さい。

（文責・事務局）

ひょうご棚田シンポジウムが開催されました

昨年度棚田学会賞を受賞された「棚田LOVER's」が、棚田保全のためのシンポジウムを計画し、兵庫県、公益社団法人ひょうご農林機構の主催、棚田LOVER'sの運営で、10月23日（土）午後開催されました。棚田学会も名義協力をしました。

会場は、兵庫県神崎郡市川町のリフレッシュパーク市川ですが、オンライン（Zoom）でも参加可能でしたので、私はZoom参加しました。

開会挨拶に続いて、報告「市川町上牛尾地区の棚

田保全活動について」永菅裕一氏（NPO法人棚田LOVER's 理事長）があり、大久保徹氏（株式会社ポプラ社）および浅井智子氏（自然育児森のわらべ多治見園園長）がコメントをしました。

続いて、基調講演「棚田の社会的価値とその継承に関する課題」安井一臣氏（棚田学会理事）がありました。国内外の棚田景観、農地の多面的機能（とくに棚田耕作による地下水涵養の実例）、都道府県別食料自給率等を説明した上で、棚田地域の活性化にむけたいくつかのキーワードに基づいた棚田地域振興のあり方、棚田耕作者の育成方法等、具体的な方策を論じました。「近年とみに懸念される地球規模での気候変動リスクの軽減に成功しなければ、人類の未来は危うい」という考えが、講演全体に貫かれていたことが印象的でした。

これらを受けて、パネルディスカッション「棚田・里山再生のために今私たちができること」が、コーディネーター：中澤朋代氏（松本大学総合経営学部准教授）、パネリスト：中里良一氏（一般財団法人日本グラウンドワーク協会理事長、棚田学会理事）、谷垣忠之氏（宮垣棚田振興協議会会長）、濱田将司氏（NPO法人明日香の未来を創る会理事）、安井一臣氏（棚田学会理事）でおこなわれました。（文責・山路永司）

「棚田・段々畑を核とした地域活性化シンポジウム」が開催されました

10月25日（月）26日（火）に和歌山県紀美野町で標記シンポジウムが開催されました。初日はシンポジウム、2日目が現地見学会。シンポジウムでは、講演1「中山間地域における資源と歴史的景観」早稲田大学教育・総合科学学術院教授：高木徳郎氏（棚田学会理事）、講演2「中山間地域活性化に関する取組について」島根県中山間地域研究センター研究員：貫田理紗氏につづいて、コーディネーター大浦由美氏（和歌山大学観光学部教授）、パネリスト北裕子氏（小川地域棚田振興協議会会長）および外山麻子氏（棚田を守ろう会）によってパネルディスカッションが行われました。最後に中島峰広氏（棚田学会顧問）がシンポジウムを総括しました。

シンポジウムに先立ち、「わかやまの美しい棚田・段々畑認定証授与式」が行われ、紀美野町の「小川地域棚田振興協議会」（北裕子会長）に認定証が授与されました。今年授与された「小川地域」は棚田地域振興法に基づく指定棚田地域で、そのうち「中田の棚田」では、2019年から「中田の棚田再生プロジェクト」が始動。「草刈り王決定戦」「棚田 de CAMP」などのイベントを開催しながら、現在までに水田3枚、畑10枚を再生しています。この取り

組みには、地域おこし協力隊員2名の若い力が大きく貢献していて、その活動の様子は、同協議会の公式HP (kiminoriceterrace.com) でも日々、発信されています。(事務局)

事務局ニュース

■編集委員会からのお知らせ

棚田学会誌第22号投稿原稿募集

下記の通り、『棚田学会誌』第23号に掲載する原稿を募集します。

○募集する原稿の種類

論文 24,000字以内
事例研究 16,000字以内
報告 12,000字以内
文献紹介 4,000字以内

※上記のうち、論文には編集委員会による査読があります。その他の種類には査読はありません。

- 投稿締切 2022年1月10日(月・祝) 締切厳守
- 投稿に際してのお願い
- ①紙に印字した原稿3部を、下記送付先まで郵送して下さい。
- ②編集委員会による内容確認の後、電子データの送信先などをご案内します。
- ③表紙に、標題・英文標題・投稿者の氏名・住所・所属先・メールアドレスを記して下さい。
- ④論文を投稿する場合は、原稿の本文1枚目には表題のみを記して、本文を書き始めて下さい(査読は投稿者名を伏せた形で行うため、査読者に投稿者名が分からないようにするため)。
- ⑤論文・事例研究・報告を投稿する場合は、原稿の末尾に内容の要旨(300～600字程度)を記して下さい。
- ⑥その他、詳しい投稿の要領については、棚田学会ホームページの投稿規定を参照下さい。

○投稿原稿の送付先

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学教育・総合科学学術院
高木徳郎研究室気付 棚田学会編集委員会

■棚田学会第8期の役員が決まりました

2021年8月21日(土)に行われた棚田学会総会において、第8期の役員体制が発足しました。

理事一覧 (任期は2021/8/21～2024年総会日)			
1	上野 裕治	元長岡造形大学	留任
2	内川 義行	信州大学農学部	留任
3	遠藤 牧人	東北芸術工科大学	留任
4	大澤 啓志	日本大学生物資源科学部	留任
5	岡島 賢治	三重大学生物資源学研究科	留任
6	岡田 洋民	元万有製薬株式会社	新任

理事一覧 (任期は2021/8/21～2024年総会日)			
7	落合 基継	早稲田大学社会科学総合学術院	新任
8	菊地 稚奈	九州大学・(株)アービカルネット	新任
9	栗田 英治	農研機構農村工学研究部門	留任
10	齊藤 裕嗣	東京文化財研究所	留任
11	関口 広隆	(公社)日本ユネスコ協会連盟	新任
12	高木 徳郎	早稲田大学教育・総合科学学術院	留任
13	高橋 久代	ミュージカルカンパニーふるぎやら	留任
14	竹田 和夫	新潟大学非常勤講師	留任
15	中里 良一	一般財団法人日本グラウンドワーク協会	留任
16	花野 耕一	東京都教育庁	留任
17	堀田 恭子	立正大学文学部	新任
18	松澤 徹	早稲田大学高等学院	留任
19	向笠 功一	SPR(株)	留任
20	本中 眞	奈良文化財研究所	留任
21	安井 一臣	元バイエルクロップサイエンス(株)	留任
22	山岡 和純	国際農林水産業研究センター	留任
23	山路 永司	東京大学名誉教授	留任
24	山本 早苗	常葉大学社会環境学部	留任
25	吉田謙太郎	九州大学エネルギー研究教育機構	新任

監事一覧 (任期は2021/8/21～2024年総会日)			
1	水谷 正一	宇都宮大学名誉教授	留任
2	宮元 均	(株)アクアテルス	新任

評議員 (任期は2021/8/21～2024年総会日)			
1	阿久澤剛樹	GICリアルエステート・インターナショナル・ジャパン(株)	再任
2	五十嵐 勉	佐賀大学	再任
3	出田 和久	京都産業大学文化学部	新任
4	岡村 成実	和歌山県農林水産部里地・里山振興室	新任
5	小川 直之	國學院大学文学部	再任
6	川路 勝	佐賀県農林水産部	新任
7	神田 竜也	棚田学会会員	新任
8	楠瀬 慶太	高知新聞社	再任
9	小谷あゆみ	農ジャーナリスト/フリーアナウンサー	再任
10	助重 雄久	富山国際大学	再任
11	田口 譲	NPO法人恵那市坂折棚田保存会	再任
12	田中 卓二	国際協力機構	再任
13	橋口 卓也	明治大学農学部	再任
14	水野 章二	滋賀県立大学名誉教授	新任
15	嶺田 拓也	農研機構農村工学研究部門	再任
16	向笠 晶子	大山千枚田保存会	再任
17	村上 裕	愛媛県立衛生環境研究所生物多様性センター	再任
18	村越 康彦	仙台市	再任
19	矢口 智	山形県大蔵村村議	再任
20	湯浅 治久	専修大学文学部	再任

顧問 (任期は2021年委嘱日～2024年総会日)			
1	中島 峰広	早稲田大学名誉教授	再任
2	千賀裕太郎	東京農工大学名誉教授	再任
3	海老澤 衷	早稲田大学名誉教授	再任
4	堀口 健治	早稲田大学名誉教授・日本農業経営大学校	再任
5	木村 和弘	信州大学名誉教授	新任

■棚田学会2021年発表会のお知らせ

- ・日時：2021年12月4日13:00～16:30
- ・会場：Zoomによるオンライン方式
- ・お問合わせ：tanada.ac@gmail.com

■第18回石井進記念棚田学会賞候補者募集

- ・自薦他薦を問いません。
- 詳しくは同封の「棚田学会賞公募案内」をご覧ください。

棚田学会通信 第65号 2021年11月26日発行
発行/棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内
TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180
E-mail: tanadagakai@gmail.com